

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第3号 2017年8月1日

なぜ僕らは勉強をさせられるのか①<sup>†</sup>

## アンキパンが使えない理由

小原 一馬\*

宇都宮大学教育学部\*

ドラえもののひみつ道具のうち、アンキパンは特に人気が高い。このアンキパンはしかし、もし本当に発売されて使えるようになったとしても、それを役立てることはできないだろう。このアンキパンが使えない理由から考察をはじめ、私たちがなぜ勉強させられるのか、特にそれ自体学んでも社会ではあまり役に立たないようなことを学ばさせられる理由を考えていく。

キーワード：教育社会学

## はじめに

2016年に宇都宮大学教育学部において「教育社会学」の講義で扱った内容をベースとして、論文の形式でまとめた。今回は第一章までを扱う。

## ① ドラえもののアンキパン

あなたが使ってみたいドラえもののひみつ道具は何だろうか？ いろいろな人気ランキングの調査が行われているが、それらの調査でいつも上位にあがるのは、どこでもドア、タイムマシン、タケコプターなどだ。これらのひみつ道具は、マンガやアニメのなかでも何度も登場し、知名度も高い。何度も登場するのは便利だからだろうし、それらを欲しいと思う人が多いのも納得する。一方、原作マンガで一度しか登場していないのに知名度も人気も高いひみつ道具がある。それがアンキパンだ（藤子1974）。

「テストにアンキパン」というお話で登場したこのアンキパンは、食パンのような形状のアンキパンをノートに押しつければ、そのページを写し取ることができ、そのパンを食べればページをまるごと暗記することができる。しかし暗記した内容は、排泄

時に忘れてしまうので、せいぜい長くても数日しか覚えておくことができない。それでもこのアンキパンの人気が高いのは、このアンキパンを使って、テスト前に答えを丸暗記しておけばよい成績をとることができるからだろう。

さて、もしこのアンキパンが将来本当に開発されて、誰でも利用できるぐらいの値段で売られるようになったら、いったいどうなるのだろうか？ もちろん今こんなに人気があるくらいだから、それを買う人もたくさん出てくるだろう。

でももしこのアンキパンをテストで実際に使う人が増えてきたらどうなるのだろうか？

このアンキパンは、ある意味優秀な塾や家庭教師のようなものだ。お金を出して優秀な家庭教師にたのんで勉強を教えてもらえば成績が上がる。このアンキパンも同じだ。お金を出してアンキパンを買い、それを使って一生懸命「暗記」すれば、その覚えた内容を用いてテストでも良い点数をとることができる。

では、アンキパンと優秀な家庭教師との間で、違う所は何だろうか？ 少し自分で考えてみて欲しい。

## ② 塾や家庭教師と、アンキパンの共通点・相違点

どんな答えが出ただろうか？

まず、塾や家庭教師では、勉強を教えるが、アンキパンは勉強を教えてくれるわけではない。暗記を手伝うだけだ。こういう意味では、塾や家庭教師は

<sup>†</sup> Kazuma KOHARA\*: Why Are We Supposed to Study? : The reason Why Japanese Anime Character DORAEMON's Special Tool "Ankipan (Memorization Bread)" Can't be Used

Keywords : Sociology of Education

\* School of Education, Utsunomiya University  
(連絡先: koharak@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

むしろ学校とよく似ている。

また塾や家庭教師との勉強で覚えたことは、テスト期間が終わっても、しばらくは覚えていられるだろうが、アンキパンで覚えたことは、すぐに忘れてしまい、まったく頭に残らない。だから、塾や家庭教師で学んだことは、その後いろいろ役立てることができるかもしれないが、アンキパンで覚えたことは、テストの場面以外では役に立たない。

でもこうして考えてみると、これらの相違点はある意味、程度の問題だとも言えることに気が付くだろう。つまり、塾や家庭教師との勉強で覚えたことや、学校で勉強したことだって、試験対策のためだけの一夜漬けであれば、テスト期間が終われば忘れてしまうことは多いに違いない。また、テストのためだけに学んだことは、テスト場面以外ではおそろくほとんど役に立たない。

こうした試験対策のための勉強は、しばしば受験テクニックと言われる。そうした純粋な受験テクニックのうち、よくとりあげられるのが、選択問題における選択肢の選び方だ。これまでもいろいろな方法が編み出されてきた（有坂1987、清水1987、石原2008）。

その中でも特に有名なのが、有坂の「例の方法」と言われるものである。これは出題者が正解の選択肢に、不正解の選択肢を混ぜる方法を、逆回しにすることで、選択肢から正解を見つけることができる。その考え方の一例を以下に示そう。

何かの内容を示すものとして、正しいものを一つ選べという問題があったとする。選択肢の各文を読むと、どの選択肢の中にも似たような内容が含まれていることがある。その似たような部分に同じ記号をあてはめていく。たとえば①と②の選択肢の記述の前半は似ているが、後半が違うというなら、前半をAとして、後半をそれぞれBとCとする。そのように整理していくと、選択肢が次のような内容から構成されていることがわかったとする。ここまで読み解ければ、もう正答はわかったようなものである。

- ① A、B
- ② A、C
- ③ C、D
- ④ A、C、E
- ⑤ A、F

このうち、④は正解ではありえない。なぜなら④が正しいなら、②も同時に正しいことになってしまうからだ。またこれらの中で、Aは4回、Cは3回、B、D、E、Fは一回ずつ出ている。

これはつまりAとCの内容が正しくて、それに誤りであるB、D、E、Fを組み合わせ、誤りの選択肢を作っていることがわかる。誤りの内容だけの選択肢は、すぐに見破られてしまうので、部分的に正しいAやCを含ませることで、もっともらしく見せているのだ。

しかし、このような受験テクニックも、予備校の中で門外不出として伝えられている分には問題ないが、本として出版されて、多くの人に使われるようになれば、当然、問題作成者の側でも対策がとられることとなる。上記のようなテクニック対策なら、一見して選択肢がA、B、C、D、Eというような部分から構成されていることをわかりにくくするなどだろう。それを読み解ける力があるなら、はじめから普通に解答することもできるはずだからだ。

### ③ アメリカ版 大学入試センター試験 SATの改革

これとは違うが、受験テクニック対策が行われた大規模な例として、アメリカ版の大学入試センター試験の一つである、SATの改革の例がある。

アメリカの大学入試においては、SATやACTと呼ばれる共通テストの成績を提出する必要がある。このうちSATはもともとScholastic Aptitude Test（大学進学適性テスト）と呼ばれていたが、1990年にScholastic Assessment Testという名称に変わり、現在は略称だったSATが正式名称になっている。

進学適性という言葉通り、このSATというテストはもともと受験者が大学で学ぶことに適しているかを判別するためのテストだった（先崎2010）。事前に試験勉強をすることは不要で、受験者が生来持っている力（＝知能）を測ることで、大学での勉強に向いているかどうかを調べることを主な目的としていた。おそらくその結果だろうが、現在でもSATの得点は知能テストとの相関がとても高いことが知られている（Frey and Detterman 2004）。そしてアメリカの高校生は実際、いわゆる「受験勉強」をせずに、高校の勉強やスポーツ、ボランティア活動などに励みながら、それがそのまま大学進学の準備に繋がるということが多かった。「入るのは

易しく出るのが難しい」という、日本でのアメリカの大学のイメージはこのようなどころから来ているのだろう（ただしアメリカでも入学が易しいのは一般の州立大学や、コミュニティカレッジといわれる短大の話であって、いわゆる一流大学に入学するのはかなり難しい）。

だがそうしたアメリカの入学試験対策のあり方は、徐々に変わっていった。その一つの要因として、アジア系アメリカ人の入試対策文化の影響があったのではないかということが言われている（読売新聞教育部2016）。よく知られている通り、中国や韓国では、大学入試の成功不成功で人生が大きく変わると考えられている。こうした国に育った人々がアメリカにやってきたとき、自分の子どもたちに自分がしたのと同じような受験勉強を行わせて、一流大学に進学させようと考えたのは自然な流れだったろう。こうしたアジア系アメリカ人を対象としたSAT対策の予備校が、受験のテクニックを伝授するようになり、SATの成績はもはや大学進学の実性を測るものとはいづらなくなってしまった。

このようなSAT対策の受験テクニックのうち、槍玉にあげられることが多かったのが、その誤答対策だった。SATは選択問題で誤答した場合に、無回答よりも得点を下げるペナルティを課していた。まったく答えがわからなくても、あてずっぽうに解答して得点を稼ぐことを避けさせるためだ。しかし多くのアメリカの高校生はこのようなSATの仕組みに慣れていないために、自信がなくてもつい何かの選択肢を選んでしまい、この誤答ペナルティで得点を下げることが多かった。

そこで、これらのSAT対策予備校では、受験テクニックの一つとして、解答に自信がなければあらかじめ空欄にする練習を積ませることによって、上記の誤答ペナルティを最小限とするような指導を行っていた。それ以外にも、有坂や清水のものに良く似た選択肢対策などを教えているようだ（読売新聞教育部2016）。

こうした受験対策指導に対する批判への対応のため、2016年よりSATでは誤答のペナルティシステムを廃止することとした。そして1990年の名称の変更にも表れているように、試験の内容自体も、高校までの履修内容に合わせるといった改訂を行いながら、試験の位置づけを徐々に「適性テスト」から「学習到達度の評価」へと変えていった。これはす

なわち、受験生が受験対策を行うことを前提として、その受験対策が試験以外において無意味な受験テクニックを磨くことに向けられるのを避けようということである。高校での学習がどれだけしっかりできていたかを測ることにすれば、受験準備がそのまま高校での学習をより充実させることにつながるだろうという考え方が背景にある。

これらのことからわかるのは、受験生のほうで受験対策を行えば、入学試験を作成実施する側においても、試験の位置づけを変えるなどして、受験生の対策に対する対策がなされるのだ、ということである。

では、ドラえもんが生まれた未来の世界では、アンキパンという強力な受験対策に対してどのような対策がとられているのだろうか？

#### ④ アンキパンはなぜ使えないのか？

アンキパンで暗記したことは、ごく短期間しか覚えていられないので、それを学ぶことは試験対策のように、一回きりの本番への準備ということ以外にはほとんど意味がないと考えられる。それはSATの受験対策が批判されたのと同じ理屈である。受験テクニックによってSATの点数が上がったところで、そのものに受験テクニック以外の何か力が身につけているわけではない。またそこでの点数は、大学での適性というような、本人の潜在的な能力を測るものでもない。同様に、みながアンキパンを使えば、テストは測るべきものを測れなくなってしまう。

ではアンキパンによってテストが無意味化するのを防ぐにはどうした良いのだろうか？ これもみなさん、まず自分で考えてほしい。

すぐに思いつくのは、アンキパンの使用自体を制限するというやり方である。アンキパンの製造・販売を禁止したり、未成年者の購入を制限したり、スポーツ競技のドーピングチェックのように、アンキパンを食べていないか、抜き打ちチェックして、厳しい罰則を科すなどというやり方が考えられる。この場合、アンキパンの使用はカンニング同様の不正行為とみなされることになる。

もう一つのやり方は、前のSAT改革と同じような考え方である。すなわち、アンキパンが使われることを前提に、アンキパンを使っても、試験が意味を持つように試験の方法自体を変えるのだ。

「テストにアンキパン」のお話で、のび太は計算問題をまる暗記していた。これは授業で行った問題と全く同じ計算問題がテストに出る場合にのみ意味のある試験対策である。このようなアンキパンの使用法に対する対抗策は簡単だ。まる暗記では対応できないように、考え方は同じで異なる問題を出しておけば良い。そうするとアンキパンだけでは対応できなくなる。でも、覚えたことを確認したいというテストはどうしたらいいのだろうか？

一つにはそのようなことを止めてしまえばいいという考え方がありえる。考えることが必須の問題にするのだ。

大学の試験ではそういったことはよく行われている。ノートや辞書などを持ち込み可にして、それを見て答えてもいいことにする。レポートによる試験も同様だ。何を見ても構わないし、友達と相談してもいい。しかしどのような情報源を用いたかは、レポートの中に必ず書く。どこかに書かれていたものをまる写しというのはルール違反で、人の考えを利用するなら、自分の考えとは区別して引用する。

こういうやり方で、授業をちゃんと理解して、自分のものになっているかを試験することが可能となる。

もう一つのやり方は、試験の範囲を思い切り広げることだ。アンキパンではとても覚えきれないような範囲を試験で問うようにすれば、アンキパンでは対応できないことになる。

このようにすれば、アンキパンは試験で使えなくなる。正確に言えば、使ってもあまり意味がなくなる。そして、アンキパンの広まった未来の世界では、実際にそのようなことが行われているに違いない。ドラえもんは、未来の世界ではもはや不必要になってしまったアンキパンを安く購入して、のび太に使用させていたのかもしれない。

#### ⑤ なぜアンキパンを使いたくなるのか？

上記の話には、一つ落とし穴がある。わかっただろうか？

テスト範囲を広くして、覚えたことを確認するようなテストをしない、ということは、その日、その週勉強したことを確認するような小テストは、アンキパンで対策されてしまうということだ。

でもそのためにアンキパンを実際に使うかどうかは別問題である。

ここであらためて考えて欲しいのは、なぜのび太は、多くの人は、そしてあなたは、アンキパンを使いたいのかということだ。

答えはおそらく、「楽しんで試験でいい点をとりたい」ということにつきるだろう。ドラえもんも、そういう甘い考えを持つのび太にお説教をしながら、最終的にアンキパンを使った「勉強」だって、決して楽でないことを身に染みてわかるようにさせていた。

ではなぜ先生は、子どもたちにまるで歓迎されない試験をするのだろうか？

授業がどのくらい理解できているかチェックするためだったり、言われたとおりに勉強しているかどうか、チェックするためだったり、ということがとりあえずは考えられる。

もしそうだとすれば、これらは、勉強する本人の代わりに、本人のために行っているということになる。だったら、理解もできず、必要なことも覚えていないのに、アンキパンによって「覚えているふり」をするのは、むしろ自分自身のためにならないはずだ。

もしあなたが、もっと上手に泳げるようになりたいとする。そのために先生が気をつけるべきポイントを教え、それがちゃんとできているかどうかチェックしてくれる。できていないところを直していくことで、あなたはだんだんと泳ぎが上手になる。もしこれを先生がやってくれなかったら、あなたはそれを自分でやらなければ、いつまでたっても泳ぎは上手にならない。

日々の学習の小テストは、そして期末のテストも、そのようなことを目的として行っている（部分がある）。漢字テストをすることで、覚えたつもりになっていても、まだ覚えていなかった漢字を知ることができる。それがわかったら、まだ覚えられていない漢字を集中的に練習することによって、書ける漢字を増やしていくことができる。

アンキパンによって、実際にはまだ覚えられていないことが、もうすっかり覚えているように見えてしまったらどうなるのか。もうそれはしっかりできていることと先生は勘違いして、学習の次のステップに進んだり、難易度を上げたりすることだろう。それによって困ったことになるのは生徒自身である。アンキパンはその場しのぎで、できるふりをさせることによって、結果的に自分自身を困った状態



に陥れることになる。

では、アンキパンを使うというのは、長い目で見て自分のためにならない、愚かなことなのか。麻薬を使うことと同じように？ アンキパンは使えないのではなく、使うべきではないのか。

いや、そんなことはないはずだと言いたい人もいるだろう。

いったい何が間違っているのか？

そう、それを勉強することが、覚えることが本当に必要なことなのか、ということが問題なのだ。

それが例えば、アンキパンによって点数をかせぐことが、ゲームで高得点をとりたいということなどと大きく違う所である。

ゲームで高得点をとりたいというとき、多くの場合、それはそのゲームが上手になりたいということの意味を以て、上手になった結果、高得点がとれるようになるにすぎない。ゲーム自体は少しも上手になっていないのに、点数だけ高くても意味がない（と考える人は多いだろう）。だから難易度を下げれば簡単に高得点をとれても、あえて高難易度でそのゲームに挑戦する人だって出てくる。はじめは貧弱な装備でも、苦労して経験値を上げながら、だんだんと強くなって、最終的に強力なボスキャラを攻略するというのが、RPGの醍醐味だろう。アクションゲームなら、練習して技術を磨き、以前はできなかった高度なことを身につけて、難関を突破することこそが楽しい。チートを用いて、はじめから無敵状態にして、敵を薙ぎ倒していても、そのようなゲームはすぐに飽きられてしまう。

でも、勉強はそれとは違うのかもしれない。みんながみんな、漢字がたくさん書けるようになりたいと思っているわけではない。漢字なんて、どうせワープロで書くのなら、正しいものを選べるだけで十分だという考え方もあるだろう。計算だって、計算機でやればいいし、図形の問題なんて、それができたから人生で役に立ったなどという人がいったいどれだけいるだろうか。英語だって、それはできれば便利かもしれないけれど、中途半端にやってもどうせ役に立ちはしない。日本人のほとんどは中高で6年も英語を勉強して、大学でもさらにやらされて、それでも英語が本当に使えるようになったという人は、ごくわずかだ。ほとんどの人は英語ができないので、英語なんてできなくても、大して困らないように、日本の社会はできている。それならはじめか

らやらなくてもいいんじゃないか、と思っても無理はない。

もちろん、勉強の全てが無意味だという人は少ないだろうが、誰でも「これは別に勉強しなくてもいいんじゃないか」と思うことは、何かしらはあるだろう。

でも、勉強ができないと叱られ、できたら褒められる。だったら、試験のときだけ、いい成績がとれば十分だと思うのももっともなことになる。だったら、アンキパンを使ってでも何とかしたいと思うのも自然なことだ。もっとも、すでに書いたように、みんながアンキパンを使うなら、それ自体が無効化されてしまうに違いないけれど。

ではなぜ、そんな無駄な（あるいは、無駄に思える）勉強を大人はこどもにさせようとするのだろうか。大人本人だって、こんなことを勉強してきて本当に役に立ったのか、疑わしいと思っているようなことを、子どもに勉強させるのはいったいなぜなんだろうか。次の章からはそのことを考えていきたい。

## 第一章 なぜ、役に立たないことを勉強させるのか？

どうして役に立たないことを勉強させるのか、それを身近な大人（両親や先生）に聞いたら、なんと答えるのだろうか。まず自分で想像して考えてみて欲しい。そして実際に大人たちに聞いてみよう。どんな答えが返ってきただろうか。

### ① 勉強の内容は役に立っているが、本人にわからない？

まず一つめのパターン。

「あなたにはまだ意味がわからないだけで、大人になったら、勉強して良かったと思うのよ」という答えだ。

ただし、このようなことは、実際にはあまり起こらないかもしれない。というのも、大人になったときにふだんから必要となるような大切なことは、あまりに当たり前になっていて、自分がそれを勉強したことさえ忘れてしまうからだ。学んだことさえ忘れてしまっていることを、わざわざ「勉強して良かった」とは思わない。先ほど書いた漢字や計算などはその類と言えるだろう。漢字が書けて、計算ができる人は、それが当たり前になっていて、小学校でしっかり勉強してそれを身につけていったことも忘れてしまう。自分の子どもが宿題で漢字ドリルや計算ド

リルをやっているのを見て、そういえば、自分もこうして勉強したのかなと思うのだ。

でもそうして、自分が勉強したことを思い出したところで、これらのことは、もはやできて当たり前になっているから、やっぱり「勉強してよかった」などとはあまり思わない。理科や社会科で勉強する、身の回りの自然や社会の仕組みといったものも同様だろう。何のために花は咲くのか、なぜ虫は飛ぶのか、なんのために選挙をするのか、お店の人はどんな工夫をしているのかなどなど。そうしたものの見方というようなものは、いったん身につけてしまえば、当たり前のものになってしまって、それ以前はどのようにものごとを捉えていたのかも思い出せなくなってしまう。

でも何かの事情で、誰もが小学校で勉強しているようなことを学ばずにすごしてしまったら、困ることも多いだろう。

だから、社会で生きていくのに本当に必要なことは、それを勉強してよかったなあと思うことは普通ないけれど、でもできなかったら困るのだから、やはり必要だったのだ。その必要性は子どものときにはわからないし、大人になっても、いわれてみなければわからないことが多いけれど、実際そういうことはたくさんあるだろう。

## ② 内容そのものは役に立たなくても、過程が役に立つ

二番目の種類の答えは、勉強した内容そのものではなくて、その過程に意味があるというものだ。これは勉強の、一種の副産物のようなものにむしろ意味があるということである。

先ほど僕は、図形問題の内容それ自体が日常生活や仕事において役に立つことはほとんどないだろうと言った。建築家でもない限り、円に内接する三角形の面積がどれだけかが、必要になるようなことはまずないだろう。

でもそうした図形の問題を通して、僕らは見た目の直感をきちんと理屈に置き換えて捉えなおす態度を学ぶ。代数のほうでは、目の前の現象の背景にある法則性を捉えることの大事さを学んだりする。

たとえば、 $1+2+3+4+\dots+100$  みたいな計算がある。これをそのままやったら結構大変だ。さらにこれを10000まで繰り返せと言ったら、誰でも面倒だと思うだろう。

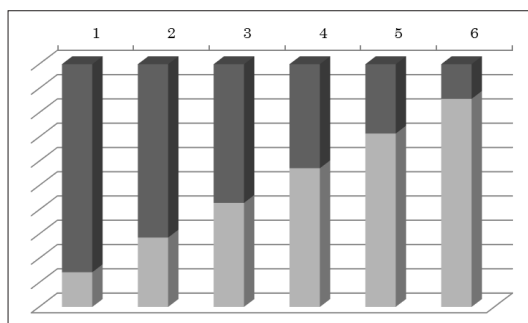
でもこの計算は  $(1+100) + (2+99) + (3+98) + \dots$

みたいに置き換えてしまえば、簡単に計算することができるということを学校で学ぶ。こういう計算それ自体をやることはその後減多にないかもしれない。けれど、こういうことを学校でいろいろと学べば、毎日やらなければいけない単純作業を、効率化する方法がきっとどこかにあるんじゃないか、というような発想を持つ人が出てくる。

人類の文明の歴史が、一人一人がバケツを持って川から水を運ぶ代わりに、水路を引いて、ほしい時にいつでも水が手に入るようにすることからはじまっていることを考えれば、このような発想を育てることの大切さは、わかってもらえるのではないか。

また、この問題を次の図のようにグラフにおきかえて捉えることを学べば、同じものもいろいろな見方ができる、というようなことを学べるかもしれない(図1)。

図1  $1+2+3+4+5+6$  の計算方法の図示



$1+2+3+4+5+6$  は、図の薄い部分の面積だ。これは  $(1+6) \times 6$  の半分である。同様に  $1+2+3+4+\dots+100$  も  $(1+100) \times 100$  の半分になる。

「同じものもいろいろな見方ができる」ということ自体は、大学生くらいになれば、大抵言葉としては理解できているだろう。でも実際にいろいろな見方ができるかどうかというのは、そうした考え方を何度も実践して、体にたたきこまれているかによる。それは一朝一夕で身につくものではないから、実践を繰り返していく他ない。

このように、勉強には、その内容それ自体よりも、そこで身につく「ものの見方」が重要だということがしばしばある。そしてその「ものの見方」はいろいろなところで実際に立つ。

でも、受験勉強には、こういう理屈付けもできないような、まったくどうでもいいことをひたすら覚

えさせられる、単なる苦行にしか思えないようなことも多くあるだろう。

それすらも、「根性を鍛える」というようなかたちで正当化されることもあった。でもだんだんとそういう考え方は、非科学的で時代遅れの精神論として、体罰などと一緒にされ、批判されるようになった。

しかし近年こうした精神論は「非認知的能力」として、教育心理学や教育経済学の世界で注目を集めるようになっていく。そうした研究の代表的な成果を紹介しておこう。

まず「マシュマロ・テスト」から。

「マシュマロ・テスト」とは、小さな子どもの自制心の有無を測るために、ウォルター・ミシェルらが考案したテストである (Michele 2015)。それは次のように行われる。

幼稚園で子どもを部屋に実験者と二人きりにさせ、(あらかじめ訊ねていた) その子が好きなお菓子を見せる。そして、いますぐ一つもらうか、ちょっと待って二つもらうかを選ばせる。多くの子どもは誘惑に耐え切れず、その一つを食べてしまおうとするが、中には待って、二つもらうことを選ぶ子もいる。そして待つことのできた時間を測る。

この実験を行った上で、彼は待つことができた自制心の高い子ども上位三分の一と、そうでなかった子ども下位三分の一がその後どうなったかの追跡調査を行った。その結果、待つことのできた子どもたちはそうでなかった子どもたちに比べ、前述のSAT (アメリカ版センター試験) において200点以上高い得点をあげていることがわかったのである (Michele 2015)。

いきなり200点といっても、それがどの程度の差なのかかわからない。200点違っていると大学入試でどう変わってくるのだろうか。アメリカの各大学入学者の下位25%の得点の一覧を調べてみよう (Sawyer 2016)。これはほぼボーダーラインとなる得点だ。

この得点を、アイビーリーグといわれるアメリカ東部の有名大学のグループの中で比較すると、最高のハーバードで1480点 (ちなみに上位25%は満点の1600点)、最低のコネルおよびダートマスで1410点だった。同じアイビーリーグでもある程度の違いはあるはずだが、その得点差はたった70点だ。ちなみにMITやシカゴ大学もハーバードと同じ

1480点、スタンフォードで1470点なので、全米最難関の大学は数字も似通っていることがわかる。

では、ハーバードの得点より200点下がると、どうなるか。するとワンランク下がるイメージとなり、有名どころだと例えば (州立大学だが) UCLAで1280点、UCバークレイで1330点となる。比較になるかどうかかわからないが、日本で言うなら慶応、早稲田とMARCHくらいの違いなのではないだろうか。

つまり幼児のときの自制心の差が、これだけの差となってその後現れるということだ。

このような、学校教育での成功と関係した自制心だが、育てることができないのなら、単にそういう性格の人が、将来成功しやすいというだけのことになってしまうだろう。でもこの自制心はさまざまな技術によって身につけることができることがわっている。たとえば、目の前にあるクッキーを食べずにがまんするには、「このクッキーはにせもので、食べることはできない」と思ってみるだけでよい。こどもにそういう考え方を教えるだけで、いきなり15分でもがまんできるようになる (Michele 2015)。もちろんこの技術ひとつで、根本的な自制心が高まるというわけではないが、自制心というものが単なる性格の問題ではなく、自分の意志をコントロールするためのさまざまな工夫の結果だということはわかるだろう。

この自制心と関連する力として、人々の注目を集めている力に「やり抜く力 (GRIT)」というものがある。

高い学力を身につけるといっただけでなく、様々な場面で何かの課題を最後までやり遂げる力とはどのようなものなのだろうか。ダックワースらはこの「やり抜く力」を、12個の質問に答えることで計測できるようにした (短いバージョンだと8個)。これらの質問は、失敗に挫けず、途中で目移りせずに、一つのことを最後までやりぬくことができたかを訊ねている。質問の一部を紹介しておこう (Duckworth, Peterson, Matthews, Kelly 2007 に基づく著者訳)。

- 私はこれまで、重要な課題を達成するために、挫折を乗り越えた経験がある
- 私は、成し遂げるのに数年以上かかるゴールを達成したことがある

○ 私は、時々興味を持っていることが変わる(逆転項目)

ダックワースらによれば、陸軍士官学校の訓練をくぐりぬけられるかどうかは、成績や体力、リーダーシップスコアなど数ある能力の中でも、この「やり抜く力」が高いかどうかによって決まる可能性が高かった(Eskreis-Winkler, Duckworth, Shulman, and Beal 2014)。その他、さまざまな領域で、この「やり抜く力」の重要性が確認されているし、これを読んでいる読者のみなさんも、これがきっと大事なことだろうなということは何となく感じてもらえるだろう。

またこの質問項目を見ると、これらがいわゆる「達成経験」や「挫折から立ち直った経験」などに関係しており、ゆえに学校教育の中で効果的に育むことが可能であることがわかる。もちろん性格的に、生まれつき我慢強い人もいようだろう。でも、子どもの頃にはすぐにあきらめてしまうような子だったとしても、親や先生、友達に励まされて挫折から立ち直り、何かを達成するという経験ができた人は、その後の人生において「やり抜く力」が以前よりも強くなっているのだ。

いわゆる受験勉強も、こうした「達成経験」の中を含めることができるだろう。受験勉強の中身がいかに無駄なものに見えたとしても、そこに意味を見つけて努力し続けることができれば、それは「やり抜く力」を高めることにつながるとも考えられる。

このような非認知的能力と学校教育との関係を、また違った側面から調べたのがヘックマンらのグループである。彼らは、GEDと呼ばれる日本で言う高校卒業程度認定試験の合格者がその後どうなったのかの追跡調査を行った。GEDは、大学短大進学者の最低限の学力水準を保証している。つまりGEDに合格していれば、大学や短大に進むだけの学力があるはずだということだ。

しかし高校を卒業せず、GEDだけ合格した者のその後を追跡してみると、22歳の時点で何らかの高等教育を終えるか大学に在学中のものは3%しかいなかった。一般の高校の卒業生では46%にのぼるのにだ。その他、収入や失業率、違法ドラッグの使用率などの数字を見ても、GEDの合格者はその他の高校中退者たちとほとんど変わらなかった

(Heckman, Hsueh and Rubinstein 2000, Heckman and Rubinstein 2001)。この結果から、ヘックマンらは、高校生活で身につくような自制心や「やり遂げる力」を持たず、学力を身につけただけのGED合格者は社会で働いていくために必要な力を身につけていないのだと考えた。

もっとも、ここでみなさんは疑問に思うかもしれない。高校は卒業していなくても、アメリカ版卒認定試験であるGEDに合格した人は、少なくともその試験に合格できるだけの学力を身につけるための努力はしているはずではないかと。ふつうに高校を卒業した人たちと、彼らが違うのは勉強をしたかどうかではなく、校則を守ったり、友達と仲良くできたりというような、学校という環境に適応できるかということなのではないか。それができない人だから、その後の人生において、大学や会社組織などになじめないのではないか。それは性格の問題なのではないか。

確かにそうかもしれない。

とりあえずわかっているのは、学校での成績と一般的な学力テスト(原則として、そのための準備なしに受けさせられる学力テスト)とは、IQなどに代表される認知的能力と、性格的な非認知的能力との関係が異なっているということだ(Borghans, Golsteyn, Heckman and Humphries 2016, Almlund, Duckworth, Heckman and Kautz 2011)。オランダ、イギリス、アメリカのデータに基づく分析では、学校での成績は性格(特に上記の「やり抜く力」)との関係がより強く、一般的学力テストのほうはIQとの関係がより強い。

つまり生まれつき賢い人は学力テストで高い点をとれてしまうが、学校で良い成績をとるには、それとは別に非認知的能力が必要だということだ。GEDもまたこうした学力テストと近い性格を持つため、「やり抜く力」などといった非認知的能力が低くても、もって生まれた知能だけでパスできてしまうのだといちおうは考えられる。ふつうに高校で勉強して大学に進学するというコースは、一見、余計なことをさせられているように見えるが、その余計なことを面倒くさがるような人は、結局、大学を卒業することもできないし、しっかり働くこともできないというと考えられることはできるだろう。

一方で、日本の大学入学試験など、努力を必要とするような試験は、単に頭が良いか悪いかではなく、



その性格も示しているのかもしれない。これは次に見る「評価のために勉強する」とこともつながってくるので、また後で見ることにしよう。

さて、このように、一見無駄に見えるような勉強も、それにしっかり取り組ませることは忍耐力を向上させるのに役立っているのではないかということが考えられる。この場合、無駄に見えるようなことからこそ、そうした「やり遂げる力」といった非認知的能力を高める上で役立っているのではないかと考えられるのだ。

### ③ 評価が役に立つ

とはいえ、「役に立たないことで、かえって役に立つ」ということには、どうにもうさんくさいところがある。それだったら、教育内容はなんでも構わないということになるからだ。つらいことをわざわざさせて、忍耐力を高めるなんて、虐待の言い訳と区別がつかない。

また、どうせ「やり遂げる力」を身につけさせたいのなら、本人が自発的にその過程に意味を見出して、自己コントロールをする力を同時に育てた方がよいのではないか。「こんなことやっても無駄なんじゃないか」ということを無理にやらせるより、本人が「これは役に立つ」と感じられるようなことを、自分自身の意志の力でやり遂げさせればいい。実際、作業それ自体はつらいが、本人にとって目に見えて役に立つようなことはいくらかでもある。たとえば筋トレなどがそうだし、体重制限などもそうだろう。やりたいことを自分で選んで、それを自分の力で達成できるよう支援するだけで良いのかもしれない。

もしそうだとしたら、それでも直接役に立たないことを大人がわざわざやらせるのに、他にどんな理屈があるのだろうか。

残るのは、「評価が役に立つ」という考え方だ。

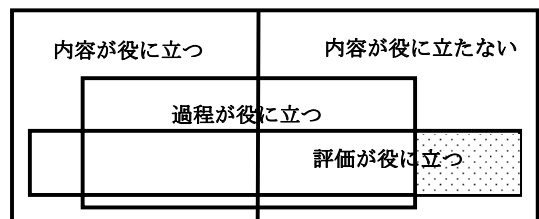
学んだことそれ自体は将来、何の役に立たなくても、試験でいい成績さえとれば、その成績だけは後でいろいろと役に立つ、だから今は苦しくても、がんばれということだ。

これはもっともよくあるタイプの説得だろう。勉強の中身にも過程にも意味がなくても、その評価にだけは意味がある、ということだ。これは図2の着色された部分にあたる。

この場合、役に立たないことを勉強させられ、そ

れで評価されることは「すでに決まっていることで、すぐには変えられないことだ」という前提がある。それは「仕方ない」ことなのだから、あなたにできることは勉強するか、しないか選ぶことだけだ。しかしもし勉強しなければ、あなたは〇〇高校、〇〇大学には入れない。入りたければ、黙ってただ勉強しろ。・・・こういう説得方法である。

図2 説得に用いられる勉強の意味



この説得であなたは納得するだろうか？

納得するくらいなら、きっとこの文章は読んでいないだろう。何かむずむずするものを感じているはずだ。それを言葉にしてみよう。

考えられる疑問は次の二つである。

その一。その高校、大学に入ることに、直接には無駄なことを我慢して勉強するだけの価値があるのだろうか。

その二。なぜ大人は、直接役に立たないことをわざわざ評価するのだろうか。

これらの問いについては、続編において答えを出していきたい。

### 参考文献

- 有坂誠人. (1987). 『例の方法』 学習研究社
- 石原千秋. 2008. 『中学入試国語のルール』 講談社現代新書
- 清水義範. (1987). 『国語入試問題必勝法』 講談社
- 先崎卓歩. (2010). 高大接続政策の変遷. 年報 公共政策学 = Annals, Public Policy Studies, 4, 59-89.
- 藤子・F・不二雄. (1974). 『ドラえもん (2) (てんとう虫コミックス)』 小学館
- 読売新聞教育部. (2016). 大学入試改革 - 海外と日本の現場から. 中央公論新社
- Almlund, M., Duckworth, A. L., Heckman, J. J., & Kautz, T. D. (2011). *Personality psychology*

- and economics* (No. w16822) . National Bureau of Economic Research.
- Borghans,L., Golsteyn,B., Heckman,J., and Humphries,J. (2016) . What grades and achievement tests measure. *PNAS*, 113-47, 13354–13359
- Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007) . Grit: perseverance and passion for long-term goals. *Journal of personality and social psychology*, 92 (6) , 1087.
- Eskreis-Winkler, L., Duckworth, A. L., Shulman, E. P., & Beal, S. (2014) . The grit effect: Predicting retention in the military, the workplace, school and marriage. *Frontiers in psychology*, 5, 36.
- Frey, M., & Detterman, D. (2004) Scholastic Assessment or g? The relationship between the scholastic assessment test and general cognitive ability. *Psychological Science*. 2004. Vol.15 (6) . 373-378.
- Heckman, J. J., Hsueh, J., & Rubinstein, Y. (2000) . The GED is a mixed signal: The effect of cognitive and non-cognitive skills on human capital and labor market outcomes. University of Chicago xerox.
- Heckman, J. J., & Rubinstein, Y. (2001) . The importance of noncognitive skills: Lessons from the GED testing program. *The American Economic Review*, 91 (2) , 145-149.
- Michel, W. (2015) *The Marshmallow Test: Understanding Self-control and How To Master It*. Corgi. (ミシェル、ウォルター 2015 『マシュマロ・テスト 成功する子・しない子』 柴田 裕之訳 早川書房)
- Sawyer, A. (2016) . New SAT and ACT Score Ranges for 360 Colleges and Universities. Compass Education Group Blog (<http://www.compassprep.com/college-profiles-new-sat/>)

平成29年3月29日 受理